筑波大学日本文学会会報

第5号

昭和55年11月

筑波の秋……平岡敏夫……一
研究室だより……三
卒業生だより……四
住所録・名簿……一〇

筑波の秋

平岡敏夫

1

筑波の秋は私にとって何とも魅力的である。この常陸野―　関東平野北東部、筑波山麓の自然のたたずまいは、私の心のなかに少年の日からあった「日本の故郷」のイメージにかなうところがあり、冬も春も夏もまたそれぞれによいのだが、秋がとくに印象深いのは、子供のときから歌ってきた唱歌「故郷の空」（大和田建樹作詞）の一節が思い起こされるからだろう。

すみゆく水に　秋萩たれ
玉なす露は　すすきにみつ
おもへば似たり　故郷の野辺
ああ　わが兄弟（はらから）　たれと遊ぶ

明治二十一年刊行の『明治唱歌集』所収のものだが、この風景は、筑波大学の構内でも随所に発見される。整備された道路の両側にも、残された松林の下むらにも、散在する沼沢のほとりにも、野萩がつつましく花枝を垂れ、すすきの群がゆらぎ、水も豊かだ。

原曲はスコットランド民謡で、そのリズムを日本化したものであるが、江戸町人文化の邦楽とも、また古来の雅楽とも一種異なる新しい曲が小学唱歌・学生歌・軍歌等に取り入れられる過程で、このような外国曲も日本化されるに至った。

この「故郷の空」にしても、逆にこの歌によって「故郷」のイメージが私たち国民のなかに形成されて行ったわけで、「故郷の空」があるゆえに筑波の秋も見出されるという関係が出てくる。

かつて私はこの「故郷の空」について、「近代化による『故郷』との分離がこれまでの伝統曲に盛りこみえない新しい郷愁の風情を成立せしめている。」（「『国歌』と国歌」昭50・11「現代詩手帖」）と書いたことがある。曲もまた詩詞と見合っているのである。

2

昨年の夏、私は所用の足をのばして北信州・飯山線に乗り、ひとり豊田村を訪ねたことがある。豊田村として合併される前の永田村が唱歌「故郷（ふるさと）」（『尋常小学校唱歌』大3）の作詞者高野辰之の故郷である。校庭に詞碑があると聞いて丘を汗にまみれて登って行った中学校にはそれがなく、バスでさらに山深く入った永田小学校にたどりついたとき、その山峡の風景がやはり私の心のなかの「日本の故郷」にかなうものと感じられた。生家を訪ね、縁側でそこの奥さんから高野辰之 ― この『日本歌謡史』『日本演劇史』の高名な学者の残したものを見せていただいたが、「兎追ひしかの山」も「小鮒釣りしかの川」もすぐ裏に、すぐ前に、あるのだった。

「兎追ひし」とは毎年春に、村中総出で兎狩りを行ない、兎汁に舌鼓を打つ、一年でもっとも楽しい行事のことだと聞いた。上京した高野辰之が「忘れがたき故郷」として、その第一行にこれを置いたのもうなずかれることだが、私たちのイメージには村中総出の兎狩り・兎汁といったものはない。そういう個人的・地域的なものをこえて、この故郷の自然・風景は、日本の自然・風景となり、私たちに「故郷」のイメージを形成せしめたのである。

高野辰之がこのようにうたい、全国の小学生がこれをうたいつぐということがなければ、山は、木を伐り、兎を追い、炭を焼く、山であり、川は用水ともなり、氾濫もし、うなぎもとれる、川にすぎない。土地の人々は、それをたんに、山と言い、川と呼ぶだけである。きわめて即物的なものなのだ。地域性・身分性がくずれ、人々が自由に村をはなれ、異郷に身を置き、都会と田舎のへだた

りがますます増大する近代に及んで、山や川、萩やすすきも別な意味を持つようになった。そこには距離の感覚、非在の意識ははたらいているはずである。

3

筑波は記紀・万葉以来、うたいつがれてきた土地である。日本の伝統的な自然がここには筑波山とともに存在し、その自然のなかに多くの研究施設が入りこんできて、新しい風景を形づくってきている。一応そのように考えて、古来の伝統を継承したよりよき近代へ、という志向がある、とされている。

そこに生まれてくる新しい風景のイメージが私にはまだ浮かんでこないし、そんなものはまだ形成されていないと言ってもよい。「故郷の空」の風景・自然自体、近代によって新しい風景・自然となったものであるが、その萩もすすきも命運をけっして保証されているわけではない。むしろ、もはや「故郷の空」のようにはとらえられていないだろう。若い学生諸君にとって萩は萩で、すすきはすすきに過ぎないだろう。それはそれでよい。だが、筑波の秋をそこに重ねてみた「故郷の空」が、「日本の故郷」となったように、新たな非在の意識のなかで、筑波の、日本の、新しい風景があらためて求められなければならないだろう。